

## 『大漢和』と『新明解』 ～辞書という世界の、両巨頭～

(松江南高校「図書館報」より ※一部加筆)

電子辞書やウィキペディアが幅を利かせる時代。辞書をパラパラめくるという慣れ親しんだ光景はいつか完全に消滅するのではないか。そんな危惧すら覚えますが、どっこい図書館には今なお様々な辞書が存在感を見せつけています。

その代表が、『大漢和辞典』です。

『大漢和』と言えばその圧倒的なスケール。一般的な漢和辞典は親字（見出しの漢字）1万前後、熟語3万～5万あたりが標準的ですが、『大漢和』は親字だけで5万字、熟語は53万余語。まさに桁違いです。

しかも、一字の解説が詳細。たとえば親字「天」には、まず文字の意味24通りを載せ、熟語・故事成語等を1,702語掲載。実に58ページにわたって解説が続きます。そうした膨大な量の文字たちは、索引1巻・本編12巻の全13巻に収められ、出版されました。総重量40kg。引っ越し泣かせの大物です。

『大漢和』は漢字の読み方を調べる辞書ではありません。翻訳本のない漢文を読むための辞書です。世界中の大学において、古代の中国文学・哲学を研究する人たちの必需品ですが、高校生には荷が重い。

ではなぜ皆さんに紹介するのか。それは、この大著誕生に至るドラマの存在です。映画「舟を編む」どころではない、ドラマがあるのです。

大修館書店社長・鈴木一平が、それまでなかった本格的漢和辞典の編纂を思い立ち、漢字研究の第一人者・諸橋徹次もろはしてつじに話を持ち掛けたのが1925年。しかし、予備調査の段階で予測をはるかに超える労力を要することが判明し、終わりの見えないまま編纂事業が始まります。

1943年にようやく第1巻を発行しますが、東京大空襲により大切な資料を焼失。一からやり直し、全巻発行の実現は1960年、予備調査スタートから35年後のことでした。著者諸橋は酷使し続けた右目を失明、左目もやっと明暗がわかるほどだったという壮絶な作業でした。

そうした経緯をつづる諸橋の「序」（巻一）と鈴木の「出版後記」（索引巻）、いずれも一読の価値があります。

続いて国語辞典の巨頭。大著というなら『日本国語大辞典』全20巻ですが、ここで紹介するのは『新明解国語辞典』（三省堂）です。他に類を見ないシニカルかつ独創的な解説が特徴。たとえば、

「動物園…生態を公衆に見せ、かたわら保護を加えるためと称し、捕えて来た多くの鳥獣・昆虫などに対し、狭い空間での生活を余儀なくし、飼い殺しにする、人間中心の施設。」

「恋愛…特定の異性に特別の愛情をいだいて、二人だけで一緒に居たい、できるなら合体したいという気持ちを持ちながら、それが常にはかなえられないで、ひどく心を苦しめる（まれにかなえられて歓喜する）状態。」

いかがでしょう。「推薦辞書」にはあまり入らず、何をもって「明解」というのかよく分からない一冊ですが、私は長年これを愛用しています。

けっこう奥深い辞書の世界。皆さんもちょっと覗いてみませんか。